

1 研究主題

生きる力が育つ国語科授業の創造

— 単元学習の理念を生かし、主体的・自覚的にことばを学ぶ子どもを育てる学習指導のあり方 —

単元学習とは、子どもの生活に根ざした価値ある課題をめぐって組織されるひとまとまりの学習である。子どもが主体的に活動する場を通じて獲得したことばの力は、生きる力を支えるものとなっていく。本研究では、単元学習の理念を生かし、主体的・自覚的にことばを学ぶ子どもを育てることが、生きる力をはぐくむことにつながると考え、子ども主体の授業を創出しようとしている。

2 研究主題設定の理由

新学習指導要領では、相手や目的、場面や状況を意識しながら言語活動をする力を育てることが低学年より繰り返し述べられている。生きて働くことばの力を身に付けるとともに、一人一人の子どもが、思慮深い言語主体として生きていく力を身に付けていくことが強く求められているのである。そして、これからの社会を主体的に生きていくために欠かせない力として、伝え合う力の育成が重視されている。伝えるべき内容や意見を育てることに配慮しながら、自己の考えをことばで表現しことばによってまわりの人たちとかかわっていくことができる子ども、人とのかわりの中で自己実現をしていく子どもを育てることが、国語科においては肝要となってくる。

本県では、平成9年度より「生きる力をはぐくむ国語科授業の創造」を主題として、実践研究に取り組んできた。「単元学習の理念を生かし、基礎・基本を見据えた指導のあり方」（平成9年度）、「単元学習の理念を生かし、一人一人を見つめる指導のあり方」（平成10年度）「単元学習の理念を生かし、主体的・自覚的にことばを学ぶ子どもを育てる指導のあり方」（平成11年度）と探求してきた一連の取り組みは、今、求められている国語教育のあり方と一致するものであろう。さらに昨年度は、子ども主体という原点を見据え「生きる力が育つ国語科授業の創造」と主題を改めた。生きる力は子どもの中で育ってくるものであり、指導者は、一人一人の子どもの中に生きる力が「育つ」ことに意を注ぎ、「育つ」ように学びの場を設け、さまざまに手引きをすることが大事になってくると考えたからである。研究大会会場校芝田小学校からは、国語能力系統表や「総合的な学習の時間」との関連を見据えた年間計画表などが示され、年間を見通し意図的・計画的に取り組んだ授業が提案された。また、学習の記録からとらえた一人一人の子どもの実態に応じて、さまざまな指導・支援がなされた。

この成果をもとに、ことばの力を系統的にとらえること、年間を見通し取り組むこと、一人一人の実態を把握すること等に目を向けながら、研究を深めていきたいと考え、本主題を設定した。

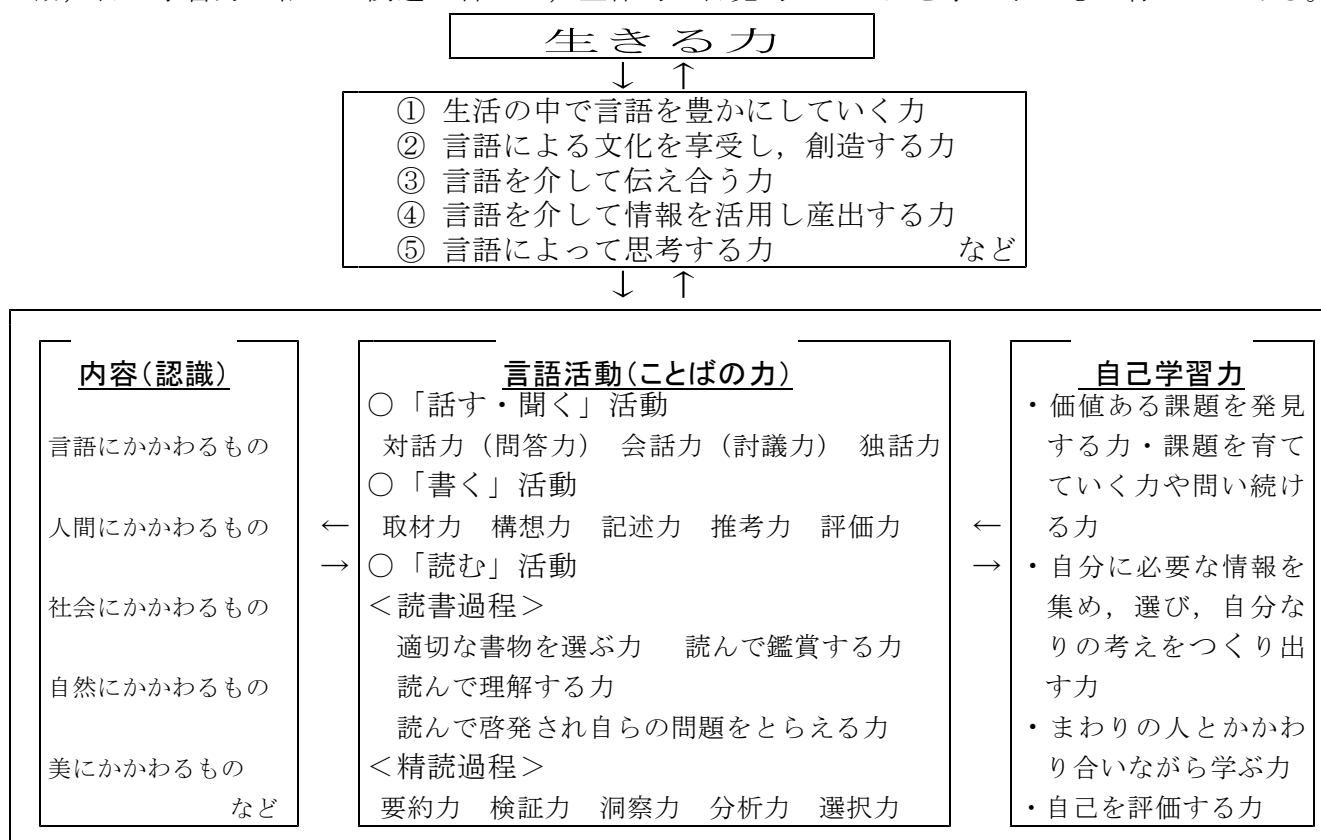
3 研究主題についての考え方

(1) 「生きる力が育つ国語科授業」とは

「生きる力」とは、「自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動することによって、よりよく問題を解決する資質や能力」と「自らを律しつつ、他人を思いやる心や感動する心を持った豊かな人間に備わった力」であり、子どもが主体的・自覚的に学習をすることを通して育つものである。生きる力は国語科においては次のような力に分析することができる。

- | | |
|--------------------|---------------------|
| ① 生活の中で言語を豊かにしていく力 | ② 言語による文化を享受し、創造する力 |
| ③ 言語を介して伝え合う力 | ④ 言語を介して情報を活用し産出する力 |
| ⑤ 言語によって思考する力 | など |

これらの能力と具体的な言語活動との関係を図示すると、下の図のようになる。内容、言語活動、自己学習力が相互に関連し合って、主体的・自覚的にことばを学ぶ子どもが育つのである。



年間を見通し、いつ、どのような内容やどのような言語活動をするのか。それを通して、どのようなことばの力を付けるのかなど、それぞれの単元のねらいを明確に位置付けて、有機的に学習指導を展開することが、生きる力が育つ国語科授業を創造することとなっていく。

(2) 「単元学習の理念を生かす」とは

単元学習は、一定の学習方法や形態を示すものではない。1つの教材を中心とした学習も、関心・意欲をもたせて、導入から目標に即した展開、発展へと進め、子どもの未知を求め、人間を探ろうとする、あるいは自分自身を見つめようとする主体的な欲求に支えられた学習の活動として成立するならば、それはまさしく単元学習である。反面、複数の資料を用意し、手広く情報を処理する活動や発表活動を設定しても、その活動が子ども自身の問題を解決したり追求したりす

る行為になっていなければ、単元学習ということができない。「単元学習の理念を生かす」ためには、そこでの学びが、その子にとって価値ある課題として、学習の対象に据えられていることが欠かせない。そのためには、子どもの生活に深く根ざした単元が構想され、必然性のある学びが組み立てられていくことが大事になってくる。また、このように生まれてきた単元学習は、「主体性」「活動性」「総合性」「創造性」といった特性を有することになる。

実践研究に取り組む中で、「話す・聞く」「書く」「読む」言語活動が必然性をもって位置付けられた単元が多く提案されるようになってきた。また、その授業研究会の場において、「子どものことばの生活に根ざす」「子どもの意識の流れ」「一人一人の思いやことばの力をとらえて」といった文言が、指導者に自然に使われてきた。ここに、単元学習の理念が国語科学習の礎として定着しつつあることを感じた。

その上に立ち、本年度もそれぞれの単元が、子どもの生活に根ざした価値ある課題となっているのか、展開においてその子にとって必然性のある学びが組み立てられているのか、といった単元学習の理念を見据えながら、さまざまな単元を構想していきたい。

(3)「主体的・自覚的にことばを学ぶ」とは

これまで「主体的」な活動を求めてさまざまな単元が構想されてきたが、その展開の中で、自己の生き方にかかわるものとしてことばを学ぶという自覚がなければ、学ぶ力も育たないし、生きて働くことばの力も十分には身に付かない。子どもの興味に追随した活動に終始し、「活動あって、学びなし」ということになってはならないのである。「主体的」とともに「自覚的」という文言を明記することにより、ことばを学ぶという教科の本質を見据え、単元を構想し、指導・支援の方法を探ることの大切さを強調したいと考えた。

また、「主体的」「自覚的」という文言のもと、どうしても他者と切り離された活動をとらえることに目が向けられるきらいがあった。ここで、他とのかかわりの中で主体的・自覚的に学ぶ子どもを育てることの重要性を再確認しておきたい。

以上のことから、「主体的・自覚的にことばを学ぶ子ども」とは、たとえば

- ① 自己のことばの生活の中から、価値ある課題を発見する力、また、そうした課題を育てていく力や問い続ける力を有する子ども
- ② 自己の課題を解決するために、自分に必要な情報を集め、選び、自分なりの考えをつくり出し、それをまわりの人に伝える子ども
- ③ 一人で考えるだけでなく、自分の考えを伝え合いながら、よりよい考えをつくり出すために話し合う子ども
- ④ 一連の学習を通して、自己の学びの過程や成果を確認することができ、新たなる学びへの意欲へと変えていく子ども

などが考えられる。

これまで、一人一人の子どもが主体となって活動する中でことばの力を身に付けることができるよう「学習の手引き」の開発が図られてきた。さらに、自らの学びを自覚的にとらえられるよう「学習の記録」への取り組みが工夫されてきた。この2つを手がかりとして、子どものことばや学習に対する主体性や自覚をはぐくむことができるよう研究を進めていきたい。

4 「総合的な学習の時間」や他教科等との連携を図るために

「総合的な学習の時間」や他教科等との連携を図ることにより、一人一人の生活に根ざした生きて働くことばの力が育つ場が豊かに、必然性をもって生じてくることになる。また、このように必然性をもった言語活動の場が年間を見通して計画されることにより、身に付けたことばの力を発展・応用しながら繰り返し学んでいくことができる。「総合的な学習の時間」や他教科等との連携を図る中で、生きて働くことばの力、あるいは基礎・基本となることばの力はより着実に身に付けられるであろう。同時に、基礎・基本となることばの力がなくては、「総合的な学習の時間」や他教科等の学習も充実してこない。「総合的な学習の時間」や他教科等の学習においても、子ども一人一人がことばの力を身に付けていることが大事になってくるのである。そこで、次のことに留意し、連携を図っていきたい。

(1) 互いのねらいを生かし合う。

国語科が道具のようになってしまってはいけないし、「総合的な学習の時間」「生活科」などがことばの力を育成するための単なる場の提供に終わってはいけない。それぞれのねらいをよりよく達成するための連携であり、互いの本質を忘れてはならない。安易に似た内容を組み合わせて単元を構想するのではなく、互いのねらいとする資質や能力をよりよく身に付けられるよう必然性をもたせて位置付けることが肝要になってくる。そのためには、それぞれのねらいとする資質や能力を明確にしておくことが欠かせない。

(2) 多様な連携の姿を探る。

国語科と「総合的な学習の時間」や他教科との連携の姿は、それぞれの学年（子どもの発達）や中心として取り扱う内容、あるいは学習する時期や子どもの実態などにより変わってくる。「国語科の授業」と「総合的な学習の時間」との区別を付けることや、連携のパターンを作ることに終始するのではなく、子どもの実態や学習内容の特徴をしっかりととらえたうえで、さまざまな連携の姿、連携の可能性を見出していきたい。

(3) 年間指導計画（カリキュラム）レベルで取り組む。

学んだことがどのように応用され、発展されていくか、見通しをもって単元相互の関係をとらえておきたい。国語科の学習がどう発展していくかだけでなく、年間計画を作成する中で、「総合的な学習の時間」や他教科等で学習を見通しておくことが必要になってくる。

5 研究の内容と方法

(1) 子ども主体の授業を創出するために、子ども一人一人の生活に根ざした単元を構想する。

子どもが主体性をもって学習に取り組むためには、一人一人の子どもの生活を見つめ、その興味・関心・必要感やことばの力の実態を的確に把握することが欠かせない。子ども一人一人の生活に根ざした「課題」を設定することに心を配るとともに、個に応じたさまざまな学びが成立するような「場」を設け、目的に応じて学習材を編成していきたい。

(2) 基礎・基本となることばの力を確実に身に付けることができるよう、次のことに留意する。

① 身に付けさせたいことばの力を明確にする。

主体的に活動をしたいといっても、基礎・基本となることばの力がなければ、活動は充実してこない。基礎・基本となることばの力が育つためには、6カ年を見通して、それぞれの単元の中で、どのようなことばの力を身に付けさせるかを明確にしておくことが欠かせない。基礎・基本となることばの力を分析・整理し、目の前の子どもの実態を重ね合わせながら表にまとめる。それをもととして年間計画を作成する等の作業が求められる。

② 必然性のある言語活動を位置付ける。

また、「話す・聞く」「書く」「読む」ことばの力は、「話す・聞く」「書く」「読む」言語活動を通して育てることができる。その子にとっての基礎・基本となる「話す・聞く」「書く」「読む」ことばの力の実態をとらえ、必然性をもたせて学ぶ中で、生きて働く力として身に付けることができるような、単元を構想し、手引きしていくことが大切になってくる。

(3) 子ども一人一人が主体的・自覚的にことばを学び続けようとする意欲・態度を育てるために単元展開の過程に応じた、指導者の指導・支援のあり方を検討する。

- ① ことばの学習への課題意識を育てるための日常的な指導・支援
- ② 自分自身にかかわることとしてことばを学ぼうとする課題へと高めるための指導・支援
- ③ 課題を追求する中で、自らの学びを深めたり、ことばについての関心を高めたりするための指導・支援
- ④ 自らの学びを振り返り、身に付いたことばの力や次への課題を確認するための指導・支援
- ⑤ 学習終了後、学んだことばの力やことばへの興味・関心が「総合的な学習の時間」や他教科等、あるいは生活の場などで生かされることへの見通しと、実際に生かされたことへの評価

(4) 主体的・自覚的に学ぶ力を付けるために、次のことに配慮する。

- ① 他とかかわり合いながら学ぶ力を育てる。

他者と出会う中で、自己の存在をとらえ直すことや、自己を振り返るための多様な視点を得ることができる。主体的・自覚的に学ぶ力を付けるためには、他とかかわり合う力は欠かせない。特に国語科では、他とかかわり合うための、対話力・問答力及び討議力が育つよう計画的に指導・支援していきたい。

- ② 自己の学びを確認する力を育てる。

学習中での自己の取り組み方や考えたことなど、その一連の学習を振り返り、記録として残していく作業が必要になる。「学習の記録」をまとめることを通して、自らの学びの価値や次への課題をとらえる力が育ってくるのである。特に国語科では、必要なことを記録として書き記す力、継続して記録を書き重ねる力、「前書き」や「後書き」を書く力等が育つよう、計画的に指導していきたい。

(5) 生きる力が育つよう、「総合的な学習の時間」や他教科との連携を図りながら年間計画を立てる。その際、基礎・基本となることばの力が繰り返されたり、発展・応用されたりしながら子どもに着実に身に付いていくことが2年間、さらには6年間という見通しをもって意図されなければならない。子どもを取り巻く地域や環境とともに、発達特性に目を向けることが求められてくるであろう。さらに、何をしたかではなく、何をねらって指導・支援をしたかという視点から1時間の授業をとらえていくことが大事になってくる。

その際、次の2つのことに十分心を配りたい。

- ① 学校図書館の効果的な利用を図る。

学校図書館の充実とともに、図書館を読書センターとしてだけでなく、学習情報センターとして効果的に利用する力を付けることができるような機会を年間計画の中に位置付ける。その中で、子どもの読書生活がより豊かなものとなるよう、指導・支援を展開していきたい。

- ② 『作文読本』の効果的な活用を図る。

『作文読本』は、学校生活における多様な活動に応じて表現力が育つよう編集されている。『作文読本』の効果的な利用を、年間計画の中に位置付ける。その中で、子どもの書くことの生活がより豊かなものとなるよう、指導・支援を展開していきたい。